

Faculty Development INVITATION

山梨大学教育学部
第38号
March, 22, 2021

2020年度「教育FDフォーラム」が開催されました。

FD委員会副委員長 栗田 真司



2020年度「教育FDフォーラム」が、12月23日(水)にJ号館のA会議室にて行われました。

FDとは“Faculty Development”の略で、大学の教育方法や研究環境などを改善するための組織的な取り組みのことを意味します。またSDの意味も含まれています。SDとは“Staff Development”の略で、教職員が、大学運営に必要な知識・技能を身に付け、その資質・能力を向上させるために研鑽することを言います。

そうした研修の一環となる「教育FDフォーラム」は、教育学部の各コース、特別専攻科、教育実践創生専攻の学生代表者、学部長、研究科長、学系長、副学系長、教務委員長、進路支援委員長、教育実習検討専門委員長、FD委員長、FD委員、支援課長、支援課主幹、支援課教務グループ職員が参加して開催されました。

まず中村学部長・研究科長から「教員養成の現状と今後の在り方」と題して基調講演がありました。概要については、以下の通りです。

- 教育学部には、約130名の教職員がおり、学生は1学年135名なのでほぼ1対1です。そのため手厚い教育ができており、全校種・全教科の免許を出しています。少人数でのグループ学習や学外での教育経験ができるのも教職員・学生比がほぼ等しいからです。
- 教育委員会との連携を図り、教育委員会が抱える課題を検討し、教育委員会の要請に応じた教員養成を行っています。例えば、山梨県は全国に先駆けて小学校で少人数学級(25人学級)を推進する方向です。さらに小学校高学年は教科担任制に

なるため、2種類の免許を持っていることがメリットになるということもあり、本学部で小中の2種類の免許を取って卒業することが就職に関して強みとなっています。

- 教員採用試験、公務員採用試験に変更があります。例えば山梨県は、小学校教員不足により、採用方法に大きな変更があり情報収集が必要です。教職支援室に尋ねに行くことが重要です。
- コロナ禍のため企業の採用人数が減っています。企業就職を検討している場合には、採用方法などについて十分に調べる必要があります。

その後、学生代表から質問や感想が寄せられました。ここに意見の一部を紹介します。

- 私が教職支援室にお世話になり始めたのは、3年次の実習終了後でした。1、2年生の頃からアクセスすればよかったと思います。学部全体で1、2年生の時から簡単にアクセスできるように周知できると良いのではないのでしょうか。
- 3年生という立場から、コロナ禍なのに教育実習をさせてもらったことに感謝しています。小学校実習では、異なるコースの学生と協力して授業をしますが、2年生の時にコースに分かれてしまうので、小学校実習まで他コースの学生と関わる機会がありません。2年の時にもう少し他コースと関わる機会があると良いと思います。
- 少人数授業が充実していると感じています。山梨大学を選んだ理由の一つでもあります。少人数授業によって双方向性が確保されるというメリットがありますが、少人数授業であることによって、同じ授業でも担当教員が異なり、授業方法、評価基準が異なることがあります。担当教員によって評価の指標が異なるようにしてほしいです。



- ・私自身は授業の内容については満足しています。しかし、コース内には様々な意見があり、対面授業の大切さについて言う人が多いです。教職員と学生の支援について、1対1で手厚いというお話でしたが、コロナのせいもあって、手厚という気がしません。それから対面授業だからこそ気付くことがあります。小中高は、対面授業をしているのですからもっと対面授業を増やしてほしいです。
- ・教職大学院の授業でOPPを上手に利用している教員とただ形式的にこなしている教員がいるように感じています。大学の教員同士でOPPを使用する目的と活用方法について研修して学んでほしいと思います。
- ・教職大学院の実習の質に差があるように思う。それは担当教員の問題が大きいです。実習を担当する先生が教科教育の先生なのか教科専門の先生なのかによって大きな差が生じているように思います。

これに対して、学部長や各種委員会の委員長から提示された課題を共有し、改善に努めていきたいなどの具体的な応答がありました。学生代表の皆さんからいただいた意見を真摯に受け止め、学部の改善に生かしていきたいと思えます。

当日の「教育FDフォーラム」に参加してくださった皆さんに心から感謝いたします。



附属学校園での研修報告書

言語教育講座 堀田 誠

私は、山梨大学教育学部附属特別支援学校にて研修をさせていただきました。研修では、まず、学校教育目標、指導方針、教育課程等に関する講義を受けました。附属特別支援学校は小学部、中学部、高等部から構成されているため、小学部から高等部を円滑に接続する一貫性、系統性のある指導計画の在り方を教育課程から学ばせていただきました。講義の後には、各クラスの授業を参観しました。各教室では、指導にあたられている先生方の熱意を感じると共に、先生方の思いを受けとめて熱心に学習活動に向き合うお子さんたちの姿を拝見しました。加えて、先生方が児童生徒の望ましい基本的生活習慣の育成にも力を入れていることを知りました。ある教室では、「エモーションボード」を用いて、クラスの児童生徒がお互いの気持ちを理解しあおうとする教育実践が行われていました。講義をしてくださった中込教務主任からは、心の安定が認知力の育成につながるということを伺いましたが、そのための具

体的な指導を実際に拝見し、大変参考になりました。今回の研修を通して、先進的な教育活動が随所で実施されていることがわかりましたが、それが実現できる背景には、先生方のご尽力はもちろんのこと、保護者の方々の深い理解、そして、大学教員が附属学校に関わっているという面があることにも気づかされました。中込教務主任は、「大学が距離的に特別支援学校の近くにあること、そして、大学の先生方が附属特別支援学校の教育に積極的に関わってくださっていることが大きなメリットになっている」、「大学の先生方が本校の児童生徒の名前を覚えてくれている」とおっしゃっていました。お話をお伺いし、学部の教員として、附属学校との連携を進めることの大切さをあらためて感じました。

今回の研修にあたり、小畑文也校長先生、近藤健一副校長先生、教務主任の中込昭彦先生、特別支援学校の先生方、そして児童生徒の皆さんには大変お世話になりました。お礼を申し上げます。

生活社会教育講座 相澤 康隆

初任者研修として、7月9日に附属小学校を訪問させていただきました。午前中に三年生の音楽と図工と社会を、午後には六年生の社会を見学するというスケジュールでした。最初は音楽の授業です。「旋律は英語でなんて言う？」という先生の質問に対して、「センリーツー」という定番のボケで答えるなど、終始楽しい雰囲気でした。次の図工の授業は、各児童が作成済みの自分の作品について、何をどのような狙いでつくったのかを文章にまとめるというものです。子どもたちにとってはつくることのほうが楽しいでしょうが、こうした振り返りの機会を設

けることは重要だと思います。その次の社会の授業は、「消費者はスーパーに何を求めているのか、そしてお店の側は消費者の要望にどう応えているのか」がテーマでした。身近な話題ということもあって、次から次へと意見が飛び交います。子どもが主体の活発な授業でした。午後は六年生の社会で、テーマは「大化の改新」です。ご担当の先生は、当時の庶民と貴族がそれぞれどのような食事をしていたかを写真で見せながら、改革の背景を丁寧に説明し、子どもたちはその説明に熱心に耳を傾けていました。

授業を見学させていただいて、特に印象に残った

のは、子どもたちの発言に対する先生方の柔軟な対応です。たとえば、三年生の社会の授業で、質問に対して予想外の答え（一見すると的外れな答え）を返す子どもがいましたが、ご担当の先生は、「こういう視点から考えると、その答えもアリだね」というようなコメントをして、その子どもの意見も黒板に書き加えました。こうした臨機応変な対応は、私

自身も教育者の一人として学ぶべきところがありますし、これから教師になる学生たちにもぜひとも身につけてほしいと思っています。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった附属小学校の先生方に、心よりお礼申し上げます。

科学教育講座 中村 拓司

初任者研修として、2020年7月10日（金）に附属中学校に伺いました。私は約20年前に神戸市の中高一貫校で数学の非常勤講師をしており、そのときから本年度山梨大学に着任するまでその学校での部活動指導を継続し、神戸市の中学校・高等学校の先生・生徒たちと交流を持ってきました。そのような経験から山梨県の中学校の様子を見てみたいと思い研修の場として四校園の中から中学校を選びました。当日は附属中学校の概要の説明と、校内の案内をしていただきました。コロナ禍ということもあり、残念ながら授業の見学はできなかったため、生徒たちの雰囲気を感じることはできませんでしたが、附属中学校の性格と任務、附属四校園の教育活動を貫く育成を目指す「子ども像」、校内研究についてより詳しい話を伺いました。附属学校というこ

とで、研究会など教員が研鑽を積む機会が多くあることが、生徒たちの学びに活かされているとのことでしたが、後期に教育実習生の様子を見学した際に、実習生が受けた指導内容や、授業時の活発で主体的な生徒の言動などからそれを感じ取ることができました。また、コロナ禍において大学との連携によりICTを活用した授業発信ができたことは、附属学校の強みを活かしたとの話もあり、今後も大学と附属学校（だけでなく実際には山梨県内の学校）との人・知・場の交流は大事なことであり、教員養成だけでなく教育学部の役割であると感じました。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった附属中学校の先生方およびFD委員会の先生方に心より感謝申し上げます。

FD研修会

FD委員会委員長 山下 和之

FD研修会は教員の活動の改善に資する材料が提供される場として有意義なものとなっています。本年度に本学部で開催した、またはこの原稿執筆時点で開催予定のFD研修会は表の通りです。

第1回は、本年度に導入されたオンライン授業の方法を初歩から解説されたもので、これによって各教員がオンライン授業を滞りなく実施できるようになりました。FD研修会は通常主に学域運営会議の前に実施されており、会議メンバーの大学教員だけを対象としていますが、その回は、研修会自体をオンラインで初めて行い、附属学校園の教員等も含めた大人数が参加したという点で、学部FD研修会の実施方法に新たな一面が提供されたという意味もあります。

第2回は、地域連携を重点化する活動として昨年

度から始められた地域学習アシストについてでした。学校の要望に応える活動であり、これまでに行われてきた学校ボランティアからさらに踏み込んだ内容で、学生が実際に現場で対処にあたるという貴重な経験が積める場が一つ加わったことを各教員が知ることとなり、指導する学生に対してこれに参加することを推すきっかけになる研修会でした。

第3回は教育に求められるアクティブラーニングの実践についてです。

本年度は例年と異なる状況であったことから、FD研修会を計画的に開催することが難しく、急な開催を講師の先生方をお願いしました。それにも関わらず、講師をお引き受けくださった先生方に深く感謝申し上げます。

	実施日	講師	講演内容
第1回	4月22日	安藤大輔先生	Zoomによるオンライン授業の実践
第2回	2月17日	高橋英児先生	地域学習アシスト事業（2年目）の報告
第3回	3月10日	堀田 誠先生	アクティブラーニングの実践 『初等外国語科教育学における実践』 ～主体的、対話的で深い学びの実現を目指して～

新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン授業を実施するにあたり、Zoomの使用方法を共有する機会としてこの研究会が開催されました。

私自身、Zoomの使用方法を少しずつ調べてはいましたが、オンライン授業を実施したことも受けたことすらない状況で講師を依頼されたというのが実状でした。ただ、短期間でもここまでできるという事を先生方に感じてもらえればということで講師を引き受けさせていただきました。そして、従来の会議室でのFD研修会とは異なり、受講される先生方はライブ配信のものを研究室等からご参加いただくという形式にして開催しました。複数の機器を繋いで参加された先生方もおられましたので参加者数の実態は不明ですが画面上は100名を超える参加者となりました。利用できるZoomの機能の紹介を軸に研修会を展開しましたが、研修での私なりのメインメッ

セージは「安心してください！誰でもできます」でした。それが伝わればと考えていましたが研修会後に先生方からお声がけいただけただけで少しは目的が達成できたはずと思い込んでいます。

さて、2021年度はZoomではなくMicrosoft Teamsが学内での主なツールとなるそうです。また新たに使用方法を勉強する必要がありそうですが、実施内容報告も兼ね最後に研修会の際にお示しした私なりのポイントを再度お示しします。「①健康に留意する(無理をしない)」「②現実に行えることを実践する」「③学生を巻き込み一緒に考える」「④今後に活かそうなことをみつける」「⑤最初から完璧を追い求めない」「⑥コツコツ練習する」「⑦不安なことは周りに相談する」「⑧困ったらGoogle先生にきく」「⑨悩んだらYouTuber先生に頼る」「⑩せっかくなので楽しむ」。

地域学習アシスト事業(2年目)の報告

2年目を迎えた地域学習アシストについて報告いたしました。地域学習アシスト事業は、「新たな課題に対応できる実践力を身につけた教員の養成」を目的とした事業で、教員を目指す学生が、教育実習や教育ボランティアでの経験を踏まえて、各学校の課題の解決に向けて、学習支援を中心に学校をチーム(アシスト学生チーム、教員・院生・専攻科生のチーム)で行う活動です。チームカンファレンスを中心とした活動であること、学校の方針(要望)に基づいた、観察/記録-分析/相談-方針・計画立案-実施というサイクルで行う活動であることが、教育ボランティア活動とは大きく異なる点であり、この活動の特徴でもあります。

今年2年目は、コロナ禍という予想外の事態にも対応しながら、受け入れ校を2校から3校(朝日小、舞鶴小、新紺屋小)に増やし、アシストをする学生の人数もアシストチームのメンバー(教職大学院のストレートマスター・現職教員など)の人数も拡大して取り組みました。また、前年度の成果とカン

ファレンスメンバーからの積極的な提案を踏まえて、担当者による毎回の訪問の実施、カンファレンスのあり方の改善(事前説明会の実施やカンファレンスの運営の工夫など)などを進め、計12回のアシスト活動と13回のカンファレンスを実施することができました。

今年度の成果としては、①学生の子ども理解と支援の質的深化など学生の大きな成長が見られた点、②各学校と情報を共有し、課題の共有が前年度以上に進められたこと、が挙げられます。一方で、3年目以降の課題としては、①より良いアシスト活動が展開できるように大学・学生と学校・教員・子どもとの信頼関係の構築のための時間の保障、②本事業で目指す「課題解決」のスパンの考え方(中長期的な展望の中で、何を課題とし、ゴールをどこに据えるか)、③持続可能な運用体制の構築(時期、日程、人的資源・組織体制)が挙げられます。

次年度は上記の成果と課題を踏まえ、より一層この事業を推進していきたいと思えます。

アクティブラーニングの実践『初等外国語科教育学における実践』

～主体的、対話的で深い学びの実現を目指して～

第3回FD研修会において、学習指導要領(平成29年告示)を踏まえた「主体的、対話的で深い学び」の導入と教員養成のための授業改善並びに教育実践に関する報告を行いました。

このFD研修会では、最初に、「主体的、対話的で深い学び」を目指した小学校学習指導要領(平成29年告示)に示された外国語活動、外国語科に関する概要を説明し、その後、教員養成のための科目である初等外国語科教育学における教育実践について報告しました。報告のなかで、初等外国語科教育学を受講している学生が「主体的、対話的で深い学び」が具現化されるように工夫し、つくりあげた模擬授業を行っている映像を学部の先生方にご覧いただきました。映像を通して、学生が教職への熱意と

意欲をもって臨んでいる姿も伝えることができました。また、映像の視聴後には、模擬授業実施までの過程、今回の初等外国語科教育学の教育実践に関する成果と課題、そして、初等外国語科教育学の授業改善の方法について報告しました。

FD研修会後には、学部の先生方から本報告に関する有意義なご意見をさまざまな観点からいただくことができました。今回報告した教育実践では、学生自身が模擬授業実施を通して「主体的、対話的で深い学び」を実現している姿が見受けられましたが、FD研修会でいただいたご意見をもとに、今回の教育実践を再検証し、初等外国語科教育学のさらなる授業改善につなげていきたいと思えます。